主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	石川　初

主 論 文 題 目：

ランドスケープ思考

― 思考法としての「ランドスケープ」の再定義 ―

本論文は、ランドスケープ思考という概念によって既存のランドスケープを再定義したものである。

「風景」「景観」「造園」など様々な訳語が当てられる「ランドスケープ」は、何らかの状況や現象をあらわす言葉として、また職能や学術領域を指す言葉として、社会の要請や趨勢の変化に応じて繰り返し再定義されてきた。本論文はその議論に連なるものであるが、従来の枠組みのなかでランドスケープの意味や使命を更新するのではなく、ランドスケープを思考として捉えること、つまり様々な事象を「ランドスケープ的に考える方法」を提案した。

近年、ランドスケープという語は広く普及し、一般的に用いられている。その重要さが益々強く認識されている一方で、その解釈は多様で、厳密な定義ができるとは言い難い。

本論では、ランドスケープを対象の構造や輪郭を把握して記述する「思考」であるとみなし、その思考はランドスケープの仕事の現場において、概念と実態とを身体を介して行き来する行為において現出すると仮定して、設計実務における行為を分析し、ランドスケープ思考の本質が「身体で地図を描く」「見立てを物語る」「仕掛けて育てる」と呼ぶことができることを示した。

その思考の応用として、地学的なスケールから日常生活風景のスケールまで幅広い事象を取り上げた。事例として、「震災時に顕在化した「生存」のための風景像」「人の移動に伴って顕在化する都市の境界や地形の特質」「土木構造物による風景」「公園にあらわれる制度の風景」「農耕や園芸などの営みがつくる風景」「農村集落に見られるアノニマスなものづくり技術」「教育への応用」について検討した。これらの検討を通してランドスケープ思考がものづくりから地域の構想、教育にまで応用が可能であることを示した。

キーワード：ランドスケープ、ランドスケープ・アーキテクチュア、デザイン、農村風景